

コラム

「富士山測候所との20年」

土器屋 由紀子 (江戸川大学名誉教授、
NPO 法人「富士山測候所を活用する会」)

丸田恵美子東邦大助教授と共同で富士山測候所の周辺で降水を採取して化学成分の測定を始めたのが1990年である。その頃は、まさか20年近くもお付き合いするとは考えていなかった。その当時、富士山で大気汚染関連の観測を行った先人としては、光電管とフィルターで上空のオゾンの観測を試みた中央气象台(当時)の関口鯉吉(1933年)や、1948年に霧氷のイオン成分を測定した名大・小山田忠四郎名誉教授ら、また、1980年~81年CO₂の連続測定を行った東北大・中澤高浩教授らの例などが知られていたに過ぎなかった。

日本の最高峰として、人為的な汚染源から遠く、また年間を通してほとんど自由対流圏の要件を満たす、大変魅力的な観測地点であることが分かったのは、気象研究所・堤之智主任研究官(現気象庁)らによる地表オゾンの連続測定や、筆者らが降水に加えて、エアロゾルの測定を開始した1993年以降である。同時に、雨が上からばかりではなく下からも降り、降水量が得られないこと、冬季の山頂はエベレストに匹敵する厳しい山であることなどの古くからの問題点もわかり、苛酷な環境であることが再確認された。加えて、2004年には気象観測所としての役割を終わり、無人化されたため、間借りしていた大気化学観測も中断させ

られるという憂き目にもあった。

1990年後半から気象研・五十嵐康人主任研究官らのSO₂連続測定や、産総研兼保直樹主任研究員らの黒色炭素などに興味深いデータが得られ、世界的な学会誌に論文が載り始めていたので、このままやめてしまうのはもったいないと考えた研究者たちが研究会を作り、同時に、富士山頂利用を希望する他分野の研究者も集めて、多くの公的機関に働きかけた。しかし、省庁の壁は厚く、「気象庁のもてあました物」の引き取り手は現れず、取り潰しが目前に迫った。そこで、静岡総研・渡辺豊博室長の協力を得てNPO法人を設立した。庁舎借用の責任主体となる為である。

2007年6月以来、測候所の一部を気象庁から借用し、NPOによる夏季2ヶ月の設営が行われている。これはあまりにも無謀な試みではないか?本来国家事業であるべき仕事を、研究者が個人的にやるなど・・・と思われながら、何とか3年目に入った。

2009年8月30日に、今年の設営が安全裏に終了し、オキシダント、COなどの観測の復活をはじめ、新粒子形成、水銀濃度、宇宙線観測などに興味深い新しい観測データが得られている。台湾、フランス(ネパール)、ドイツなどの研究者も参加し、観測ネットワーク構築へむけた国際協力も端緒に付いたところである。最大の課題である財政問題を乗り切れば、NPO経営だからこそ出来る分野横断的に開放された新しい研究施設としての将来の発展も可能かもしれない。楽観的過ぎるかもしれないが、このような形の研究施設があってもよいのではないかと思いつけている。